

# 日本点字普及協会だより

№.1 2013年4月1日

日本点字普及協会の誕生にあたって

日本点字普及協会

理事長 高橋 實

私は今春、日本点字委員会が発行した『日本の点字』\*を、関心をもって読みました。特に、福井哲也さんの「わたしは“カミ”を信じます」という一文は、私の思いと一緒だからです。また、このほど私たちが立ち上げた「日本点字普及協会」のモットーである「もっと点字を読み書きする人を増やしませんか。点字を使用する視覚障害者を増やしましょう」にも、合致するからです。点字ディスプレイ\*で読書することは、大いに結構だと思いますが、私は職員に「校正だけはピンディスプレイを使わないように」と注意しています。行替えとページ全体のレイアウトが正確に見られないからです。それに、長時間読むと指が疲れると思うからです。

『視覚障害』3月号で、<sup>ながおかひでし</sup>長岡英司さんに「就業場面における点字の活用を考える」というパネルディスカッションの様態を紹介してもらいました。当事者4人は、IT機器をフルに活用しながら、「点字の有用性と利点」を力説しておられ、特に一般中学校・国語教師の<sup>あらいよしのり</sup>新井淑則さん(52)の発表には、心を強くしました。新井さんは三十代半ばで失明。リハビリのコースにいた年配の女性から「あなた、だまされたと思って、とにかく毎日、点字に触れなさい」と言われたことが、大きな励みになりました。「毎日、触っていると単なる凸面が、文字になる。文字が単語になる。単語が文になり、やがて文章になった」。そのときの感動は忘れられないと述懐。そして、「点字で本が読めた」という達成感が気持ちを前向きに転換し、それが教職へ復職しようという決意へとつながったそうです。

中途視覚障害者には「点字は無理」と決め込む指導者がいたり、「点字は失明を告知されたようなもの」と拒否反応を起こす人などいますが、決して新井さんが特別なケースではないことを私たちは、心していかなければなりません。

いささか古い話で恐縮ですが、私が点字毎日\*で点字図書制作をしていたころは、1タイトル50セットは売れていましたが、いまは教科書ですらそれほど出なくなりました。「点字離れ」といってしまえばそれきりで、文化というより生活文字である点字を読み書きする視覚障害者を増やすというか、広げていく努力を私たちは研究し検討しなければなら

いと痛切に感じています。

これまた、戦時中のことですが、盲学校の初等部時代「莫塵」といって「メの字」を紙いっぱい書いて遊んだものです。1行 32 マスですから、32 マス×35 行=1120 文字を点字盤で競争して打ちました。ただ、当時は紙不足ですから先生には叱られるやら、負けて悔しいやらで踏んだり蹴ったりでした。また、当時なんと呼んでいたかは忘れましたが、二マス以上を使って模様作りをして遊んだものです。図書の扉の枠なども考えました。いま視覚障害者支援総合センターが作っている教科書の扉の枠は、その名残です。

点字の晴眼者への啓発活動もさることながら、視覚障害者自身ももっともっと点字を活用していくために努力しようではありませんか。

(注)

1. 『日本の点字』: 日本点字委員会 第 37 号 ([http://www.braille.jp/data/tenji\\_037.html](http://www.braille.jp/data/tenji_037.html))

2. 点字ディスプレイ: パソコンの画面に表示された文字情報を紙にプリントせずに、指で読むことを目的として開発された。多くは1行だけを表示する。ピンを持ち上げて点字を表すため、「ピンディスプレイ」(ピンディスプレイ)とも呼ばれる。近年は携帯用も開発されています。

3. 『視覚障害』: 社会福祉法人視覚障害者支援総合センター N0.298  
<http://www.siencenter.or.jp/>

4. 点字毎日: 毎日新聞社が発行する点字の週刊新聞。  
<http://www.mainichi.co.jp/corporate/tenji.html>